

酒匂川河口付近で捕獲されたウミネコの胃内容物について

飯 村 武

On the stomach contents of *Larus crassirostris* VIEILLOT
Takeshi IIMURA

はじめに

相模湾沿岸（神奈川県）で記録されているカモメ類は、ワシカモメ *Larus glaucescens* NAUMANN, オオセグロカモメ *Larus schistisagus* STEJNEGER, セグロカモメ *Larus argentatus vegae* PALMÉN, シロカモメ *Larus hyperboreus pallidissimus* PORTENKO, ウミネコ *Larus crassirostris* VIEILLOT, カモメ *Larus canus kamtschatschensis* (BONAPARTE), ユリカモメ *Larus ridibundus sibiricus* BUTURLIN, ミツユビカモメ *Larus tridactylus pollicaris* (RIDGWAY) の8種（中村, 1971）で、このうちウミネコの個体数が最も多い。これらのカモメ類は相模湾には10月に飛来して越冬し、5月まで滞留するが、ウミネコのみは夏期も若鳥が残留している。主な生息地は海岸および島嶼の岩礁であるが、足柄平野を流れる酒匂川では河口部より1~2 km上流の河原に集団で生息することがまれではなく、多いときにはウミネコのみで約1,000羽に達することがある。

酒匂川漁業協同組合では、天然のアユ *Plecoglossus altivelis* TEMMINCK et SCHLEGEL が溯上する3~5月にウミネコが河原に群棲しアユを捕食するという一方で、1965年以降毎年20~25羽のウミネコの有害鳥駆除を行っている。しかし、捕食の事実とその量を裏づける資料は乏しい。そこで筆者は、有害鳥駆除の是非を明らかにするためウミネコの胃内容物調査を行った。ここにその結果を報告する。本文に入るに先だち、胃内容物の種の同定をして下さった国立科学博物館の中村守純博士、友田淑郎博士、今島 実博士に感謝の意を表す。

材料および方法

調査したのは1973年5月4日の7時から9時までの間に、酒匂川河口から1 km上流の地点において銃器により捕獲された（有害鳥駆除）ウミネコ6個体であ

る。捕獲された個体の胃は常法によりホルマリン液で保存したのち、胃を解剖して胃内容物を取り出し、1 g目盛りの台秤を用いてその重量を測定し、種を同定した。ウミネコの各個体を捕獲の順に便宜上No.1, No.2, No.3, No.4, No.5, No.6とする。

結 果

検索された胃内容物は魚類、甲殻類および昆虫類で、いずれも水棲動物であった。ウミネコ各個体の胃内容物重量と被食動物名を表に示す。胃内容物重量は最小26.4 g, 最大100.2 g, 平均47.9 gであった。検出されたのは、魚類ではマアジ *Trachurus trachurus* (LINN.) タチウオ *Trichiurus lepturus* LINN. およびトウゴロイワシ *Atherina bleekeri* GÜNTHER の3種、甲殻類ではエビの一種およびフナムシ *Ligia exotica* ROUX の2種、昆虫類ではミズアブ *Stratiomyia japonica* van der WULP の幼虫1種で、アユは検出されなかった。

マアジはNo.1とNo.5の2個体から、タチウオはNo.5の1個体から、トウゴロイワシはNo.5とNo.6の2個体から、フナムシはNo.3の1個体から、エビの一種はNo.4の1個体から、ミズアブの幼虫はNo.1, No.2およびNo.3の3個体から検出された。特にNo.2ではミズアブの幼虫のみでその重量が32.5 gにも達していた。

考 察

蒲原（1972）によると、マアジは10~100 mの水深の中、下層にすんでいるが、3~9月の産卵期には浅い所を、またトウゴロイワシは春暖の候には水面近くを泳ぐという。更に、タチウオは深さ100 m位の泥底に群棲しているが、朝夕の薄暗い頃には水面に浮上してくるという。エビは消化が進んでいたため種の同定が出来なかったが、これはおそらく水面近くの礫の間に生息する種であると考えられる。フナムシは高潮線

表 ウミネコの胃内容物重量と被食動物

No.	胃内容物重量 g	被 食 動 物		
		魚 類	甲 殻 類	昆 虫 類
1	50.2	マアジ(1)		ミズアブの幼虫
2	32.5			ミズアブの幼虫
3	34.0		フナムシ	ミズアブの幼虫
4	44.2		エビの一種(1)	
5	100.2	マアジ(1), タチウオ(2) トウゴロイワシ(1)		
6	26.4	トウゴロイワシ(1)		

(注) No. 5 のトウゴロイワシの体長150mm, No. 6 のトウゴロイワシの体長85mm, 括弧内の数字は個体数

付近の岩の間に多く生息し、岩上をすばしこく動きまわる等脚類である(内海, 1973)。竹内(1972)によると、ミズアブは本州、九州および中国等に普通の種で成虫(体長15mm内外)は夏期に出現すると述べられている。

ウミネコはアジサシ *Sterna hirundo longipennis* NORDMANN のように完全に潜水して採餌するものではなく、せいぜい首を水中に突っ込んで行う程度である(中村, 1971)。このようにみえてくると、ウミネコの食餌物は水面近くに生息する水生動物が主で、特に魚類では水面をゆっくり泳ぐものに限られているのが特徴といえよう。柴田(1972)も、1967年3月26日に捕獲したウミネコ8個体の胃内容物を調べている。それによると、ウミネコ7個体は全くの空胃で、僅かに1個体の胃中よりマイワシ *Sardinops melanosticta* (TEMMINCK et SCHLEGEL) およびウナギ *Anguilla japonica* TEMMINCK et SCHLEGEL の稚魚各1頭を認めたにすぎないという。また、カモメ類は門洲や流れの中に佇立して、ときには水浴をするものの、稚アユらしき小魚を捕食する状況は観察されなかったと

述べている。

アユは川で孵化し、稚魚は海に下って冬を越す。体長6~7cmになって、3月から5月に川を溯上する。また、溯上は一般に薄明から薄暮までのいわゆる日中であるといわれている。このようなことから、これまでに検索し得たウミネコは、時期および時間的にアユを捕食し得る条件下にあったといえるが、捕食は認められなかった。しかし、捕食の有無の結論は、更に多くの調査例を検討してなされるべきであろう。

文 献

- 蒲原稔治 1972 原色日本魚類図鑑. 保育社, 大阪.
 中村一恵 1971 神奈川県鳥類誌(1). 神奈川県立博物館, 1-50.
 柴田敏隆 1972 ヒヨドリ・カモメ類の有害性に関する調査報告. 神奈川県農政部, 8-34.
 竹内吉蔵 1972 原色日本昆虫図鑑. 保育社, 大阪.
 内海富士夫 1973 原色日本海岸動物図鑑. 保育社, 大阪.

(神奈川県環境部自然保護課)